

木は地球を救う-29

細田木材工業(株)
顧問 細田 安治

前号で自然災害による被害の報告が紙数不足で尻切れトンボになってしまったので今号も続けてレポートします。

自然災害と言えば「地震・雷・火事・親父」の比喩は昔の話になってしまった。現代の自然災害は、「地震・風・火事・親父」ではないか。オット最近の親父は怖くない？かも・・・

冗談はさておき今号では、異常気象による地球温暖化のなかでも恐ろしい火事、山火事についてレポートします。

◇森林火災、世界で頻発

ここで新聞各紙をひっくり返してみると、でたでた沢山出てきたなかで、特に印象的だったものを報告する。

8月13日日本経済新聞夕刊1面トップ。

森林火災世界で頻発—異常気象で気温—欧州・北アフリカ・米国西部・ブラジル・アルゼンチン
異常気象で、気温上昇、空気の乾燥が続き、火災が続発、延焼しやすく、干ばつによる被害も深刻だ。市民生活に深刻な影響を与え政府が対応に迫られている。

北アフリカのアルジェリアでは森林火災が発生し65人が死亡した。フランスのマクロン大統領は消火のため消防艇を派遣すると発表した。イタリアのシチリア島では、気温が欧州の過去最高となる48.8度を記録、スペインやギリシャでも各地で最高40度を超える高温が相次ぎ、ギリシャでは過去2週間で約10万ヘクタール(東京都の面積の約半分にあたる)が消失、過去数十年で最大の環境上の大惨事という。スペインやイタリアなど各地で山火事が起きている。米国でもカリフォルニア州サンフランシスコの北東およそ150キロの地域では、2週間以上燃え続け、8万ヘクタール以上が焼失し、700棟以上の建物が被害を受け、5万人以上に避難命令が出され、各地に避難所が設けられている。火事の広がりには徐々に抑えられているものの、空気が乾燥し、風が強い状況が続くことから、鎮火にはまだしばらく時間がかかる。カリフォルニア州などアメリカ西部では、ここ数年、山火事の規模が大きくなっていて、専門家からは地球温暖化の影響が指摘されている。

南半球で冬季のブラジル中部でも、過去50日にわたり十分な雨が降らず、世界最大級のパンタナール湿原地帯等で火災が発生、ブラジル国立宇宙研究所は今年に入り5万件以上の森林火災を観測している。



ブラジルアマゾンの森林火災

このように山火事は世界各地に深刻な被害をもたらしている。

◇火山噴火

10月4日NHKBSテレビ世界のニュースのなかでスペインカナリア諸島の火山噴火により溶岩の流失による大被害が発生、リゾート地に溶岩流が押しよせ瀟洒な別荘やショッピング街、果ては路上の自動車迄を呑み込んでいく悲惨な状況が放映された。このケースで勿論山火事が発生し、ふもとの森に燃え広がっていた。火山活動も山火事の原因の一つであることは間違いない。これらを含めて一体山火事の原因はなんなんだろう。

◇山火事

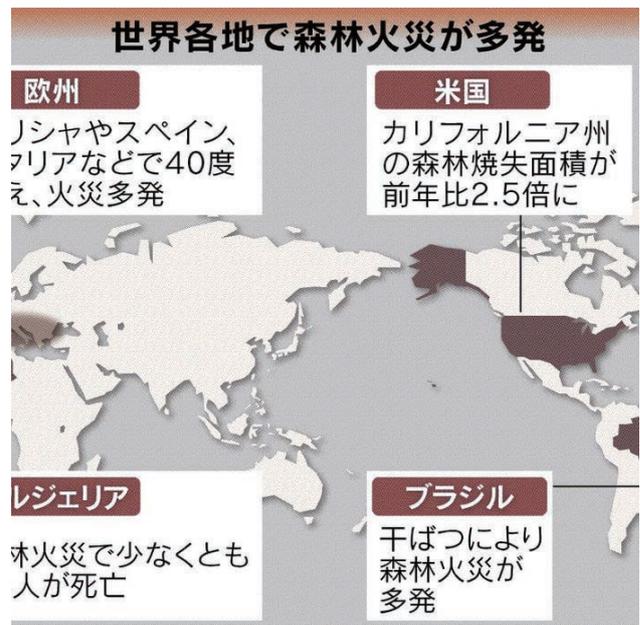
山火事の「原因とは」を調べてみると、日本の山火事の原因と、世界各国の原因とでは大きく違うことが分かった。今まで不勉強の為詳しく知らなかったことが恥ずかしい思いだ。

◇日本の山火事

林野庁の資料によると、日本は山火事の原因のほとんどが人為的なものであり、しかも被害は大きくない。以下詳細について報告する。

◇日本では「不注意」が主な原因

日本での山火事の状況を見てみよう。林野庁によると、年間の発生件数は約1200件(2015～2019年の平均)。全国で毎日約3件の山火事が起きている計算だが、全体のおよそ7割は空気が乾燥する冬から春(1～5月)にかけて集中しているのが季節的な特徴だ。原因は「たき火」が約30%と最も多く、「火入れ(野焼き)」17%、「放火(疑いを含む)」8%、「たばこ」5%、「火遊び」2%などが続く。日本では山火事の多くが人間の不注意など人為的原因による。林野庁は「落雷など自然現象によるものはまれ」としている。林野庁資料から日本の山火事は、人間の不注意からだ。先ごろ知人と山火事について話した時、日本の山火事は殆どが人間の不注意ということになった。調査では、信じられない数字だ、野焼き、焚火、たばこ、火遊び、放火とここまでの合計が62%、今時山へ入って働く人は林業従事者や、ハイカーなど少数の研究者がこのような不注意をするだろうか。信じられない。しかし残りの38%が落雷などによる自然発火なのだろうか稀に見るとしている3%は一体何なのだろうか。この資料自体の信ぴょう性はあるのだろうか疑いたくなる数字だ。

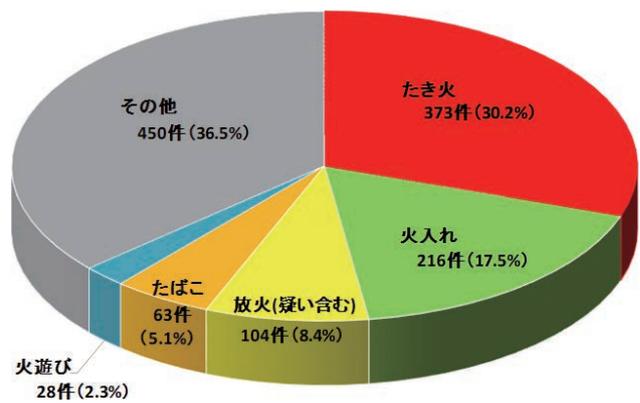


資料 日本経済新聞、ネット参照
世界各地で火災が頻発



スペインカナリア諸島の山火事、牧場まで迫る。

日本の場合、全般的に湿度が高い気候であることが幸いし、自然発火による山火事は比較的限られる。今年2月下旬に栃木県足利市で起きた山火事は、鎮火までに22～23日（約3週間）かかったが、これも自然発火にあらず、最も恥ずべきであるところの、たばこの不始末による人為的な原因とされている。



林野庁資料

海外では高温乾燥に端を発する「自然発火」

世界各地で頻発している大規模な山火事は事情を異にする。今夏、その最たる例はイタリア、ギリシャの南欧やトルコだ。自然発火が主たる原因となっているからだ。とりわけ今夏は記録的な熱波が南欧など地中海沿岸を襲い、高温乾燥状態が続いていたことが挙げられる。イタリア南部のシチリア島では48.8度を観測したことが伝えられ自然発火は一般に、森林内に積もった枯れ葉や枯草が擦れ合って起き、周りの木々に燃え広がって山火事を引き起こすという。海外の山火事はスケールが大きく、ひとたび発生すると何週間も燃え続けることが少なくない。スペイン南部アンダルシア州のコスタ・デル・ソルで5日間燃え続ける森林火災は、9月13日までに約77平方キロメートルを焼失、2600人以上が避難を余儀なくされている。消防当局によれば、同州マラガ県の山岳地帯シエラ・ベルメハの火災は、気候変動による極端な天候に加えて、人口の急速な減少と行き届かない森林の管理、さらに可燃物の蓄積などが原因だという。11日の時点で40平方キロだった延焼範囲は、翌日には残り火が新たな火災に繋がり、13日朝までに倍以上の85平方キロに広がっていた。スペインでは年を追うごとに火災の規模が拡大しており、2021年の8ヶ月で、過去10年間の平均を超える面積が焼失している。

では、山火事はなぜ起きるのか。地域ごとに諸説がありこれはという決め手はないが、傾向的には日本では人災、海外は自然災害と大別できるのではないか。いかがでございましょうか？

CO2発生の悪循環に高温乾燥に端を発する「自然発火」CO2発生の悪循環に

次に地球温暖化など気候変動とはどういう関係があるのだろうか。この問題を調べてみる。火事が起きると、温暖化の主因とされる二酸化炭素(CO2)を吸収する植物が失われるばかりでなく、燃焼によってCO2を発生する悪循環となり、結果として温暖化の進行につながりかねないのだ。森林の無いはげ山になると、保水能力が低下し、台風や集中豪雨による土砂崩れなどの自然災害が起きやすくなる。動物や昆虫など生き物の住みかが脅かされる。さらに一度焼失した森林が復元するまでに長い年月を必要とすることだ。

ここで「木材や」の出番だ。森林のないはげ山にしないよう、木を植えなければならない。木を植えるには適正年齢樹を計画的に伐採し、跡地を整備し計画的に木を植える。そして適切な木の手入れしながら、木を育て適齢期がきたら伐採する。伐採した木は用途別に使わなければならない。こんな当たり前

の木の流通がどこかで滞りスムーズに流れない。そこで国が、特に管轄省庁農水省・林野庁が、様々な施策を実行している。木材は長い間日の当たらぬところを歩んできたがここ数年やっと悲願の表通りにできた。林野庁が後押しして様々な道を作ってくれた。

その一つに公共建築物等木材利用促進法(木促法)、改正木促法として10月1日から施行された。

対象をこれまでの公共建築物から、建築物一般に拡大し10月8日を「木材利用促進の日」として規定、脱酸素社会の実現に向けた国民運動を展開していくとしている。

6月11日の参議院本会議で可決成立した。これまでの基本方針として低層建築物を対象としてきたものを中高層を含めた建築一般に拡大し、木材利用の拡大を目指すことになる。付帯決議として建築物のみならず公共土木分野、熱利用などのバイオマスエネルギーの活用推進なども加えられた。

CO2排出削減効果の最大化により2050年カーボンニュートラルの実現に資することが付け加えられた。また木材利用促進協定を締結し他事業者による協定制度を設け必要な支援を行っていく。木促法の施行で低層住宅への木材利用は促進されたが、低層のみでは需要の拡大に限界があるため、対象を建築物一般に広げることで更なる需要拡大と、需要拡大による炭素固定につなげたいとしている。続く

資料日刊木材新聞より

